

一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10-10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42-0211
定価 1部 150円
備 橋 本 清 文 堂

一泉同窓会 総会行われる

十月十五日恒例の昭和六十一年度の一泉同窓会の総会が催された。ここ数十年一度も雨に見舞われた

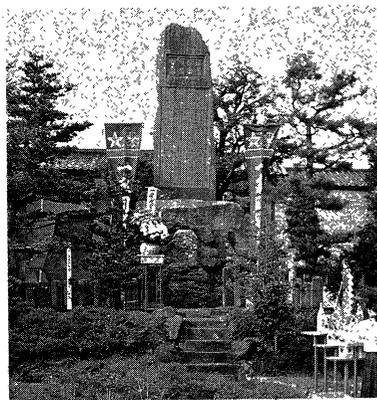


このかないという今日、昨夜迄降った雨はあがり秋晴れの一泉同窓会日和ともいふべき日となった。

当日午後三時より校庭の厳霜碑前に祭壇が設けられ、二流の同窓会標旗の許に渋谷会長、宮前会長、棒田泉丘高校長らはじめ関係者一同参列し、石浦神社長谷宮司の司祭で厳肅に祭典が行われ、全員が玉串を捧げて慰霊祭を終えた。これより会場を金沢ニューグランドホテルに移し、午後六時から総会行事に入った。

本年から総会、懇親会の企画、実施を各期の当番制とすることに、まず泉丘五、六、七回がその担当ということに決まった。初めてのことであったが担当各期の役員の大変な努力により、会場の準備、運営もスムーズに参加者も例年になく多く約二百五十名程の会員が集まり金沢ニ

ューグランド会場が手狭に感じられた。総会も順調に進行し、ひきつづき同場所で開催会に移り、東京、大阪よりの遠来組もあって、互に酒を酌み交わし、おそくまで談笑がつき名残りがつきなかつた。



当番期の役員として

副会長 中 谷 道 子

(泉6)

春の役員会に毎年の総会企画実践を当番制にしたら？と私自身の発言がとりあげられ、それのお鉢が泉5・6・7期ということになり大変慌てた。

前回迄は前副会長の小川忠男氏が責任者として詳細までやって頂いたのでとても助かっていたのが、今回からは自分達で実行しなければならぬので何度も打合せ会を行った。

山本道生副会長を軸に私たち三当番期は人員集めを精力的にやり、その結果もあって当日参加数は二四〇名を超えたようだった。

ホテル側も出血サービスというところでご厚意を頂き私たち最初としてはまあまあ出来ではなかつたらうか。と控えめの自讃を覚えている。

今回は総会に物故者供養の目録を入れたのは山本副会長の発案である。それも好評を得たようであった。会場にはこれも山本副会長製作のB・G・Mが一中校歌、泉丘校歌や各応援歌など歌詞入テープを流し、いやが上にも会場は青春の真っ只中という感を深くしたものである。

勿論いいことばかりではなくて料理のバラツキもあり、会場の広さも関係しているが少々無理をした処もあつたように思われた。

意外な処でのミスは屋外の案内広告看板の出す場所がその方面の条約で難しくなつたのは大変困つたことの一つであった。

失敗は成功の母という。来期も私たちはお手伝いすることにきまつたが、又忙しくなりそうである。

5・6・7期の方に深く感謝を申し上げるとともに、今後とも先輩のご指導と後輩のご協力をぜひお願いして私の一文としたい。

「泉」第十三号によせて

泉丘校蔵書解題目録の

編集を終えて (10)

異人館の文献 (泉丘校蔵書

整理日誌(3)

山 森 青 硯

(一 中三十三回卒)

金沢二中錦丘高校々史―昭和48・10・15刊(以下二中本と云う)十一頁に左記所載

第二中学校が仮校舎として借用した勸業博物館は、二階建洋館建築ながら建築以来二十余年を経ており、明治二十年創立当時の石川県工業学校、同三十二年に石川県第二中学校が、翌年には市立金沢商業学校もまたそれ／＼仮校舎として使用しており、学校創立の歴史と深い関連をもつ由緒あるものであった。

とある。七十年史、石川県立工業高等学校創立七十周年記念会(以下工業本と云う)十三頁に

金沢工業学校は明治二十年七月石川県勸業博物館を仮校舎とし、納富介次郎校長のもとに男女生徒百三十七名、研究生男女六十九名をもって開校した。十月二十六日日

を改めて文部大臣森有礼を迎へて開校式を成興閣で挙げた。森文相は第四高等中学(旧四高)施設視察のために来県したのであるが、中等学校の開校式に文相が出席したことは何と云つても珍しい。恐らく納富校長の幕末以来の経歴と中等工業学校の草分けと云う処に敬意を表したのであらう。

開校式には生徒代表として島田佳矣が祝辞を読んだ。同年八月かねての予定にしたがつて出羽町一番丁にあたる兼六公園内のもとの「金沢学校」跡へ移転した。五八五坪の敷地に四八四坪の校舎があり、学校の体裁を整へて来た。

とある。金商七十年史(以下金商本と云う)八頁に左記の如くある。

仮校舎と学校規則。本校最初の校舎となつた建物は、兼六園山崎山と現在の美術館(移転前の同館で成興閣の一部)の間に位置し、もと独人フォンテッケン(明治四年招聘の鉱山学校教師)の居館であつたが、明治九年(二六六)には金沢博物館の一部となり、明治十三年(二八〇)以来石川県勸業博物館東本館となつていたものである。その規模は洋風二階建て建坪一五九坪(五二五平方米)長方形(約南北九六米、東西六六米)を呈し、開窓ベランダ付(2階)を特色としていた。

この東本館は明治十三年以来各府県産出の物品を陳列してあつたものであるが、金沢市が県知事にその貸与を申請し、同年四月十日その許可を得たものである。

とある。以上三校の詳説は本校と何等の関係無い様であり、否関係がある。泉丘校本蔵書印「金沢学校」(青朱)の何たるやを知る資料である。

就中最後の金商本は、未だ既載になき異人館歴を所載してある。而してデッケン異人館写真の第三番目の発見である。

昭和54・6・8午前九時、北国新聞温井伸記者来室。(大屋愷故編世界図の件につき)橋本確文堂来室(此の人泉丘校出身、垣田先生が恩師であると云う)。山岸、垣内両先生来室(各々委員指命に就て)

泉丘校本「気海観瀾広義」和蘭字彙「二稀観本に就き左記資料登録。日蘭三百年の親交(村上直次郎)大正4・9・4富山房版(泉丘本)」

西多外喜次氏来室(連絡誌発刊の件につき)

前述デッケンの異人館を広坂通に移築し、益智館と称す(郷土数学一二七頁)。「金沢四十八名所」七四頁も右の如く誌す。デッケン館は二階建也。広坂通メソヂスド館(再移築したもの)一階建也。根太高き所の

みデッケン館に酷似している。

もう一つの異人館説がある。小川孜成著の「兼六公園誌」坤(明治27年7月刊)には

西医ノ舎館明治四年恭敏公。和蘭国陸軍一等医官ヘイア・スロイス氏ヲ聘シ、城内玉泉院九二館セシメ、医学館ニ於テ生徒ヲ教授シ、又患者ヲ治療セシメタリ。(今広坂下ノ洋館英学院ハ此館ヲ移セシモノナリ)

(本館ハ後、広坂下ニ移リテ耶蘇教会堂となりしが、近時更に他処に改築して其旧容を失ひぬ)

とある。泉丘校図書館書庫に「日本武尊銅像前石段の処に、洋服姿の者四五人写る硝子盤(ゲント種板)が在る。向つて最左立像がスロイス像であると云う。

長らく異人館と称され、是れを広坂通りに移築、英学院、益智館、警察署、メソヂスド館と成つたと云う説。尚研究を要す。



同窓の随想

「一泉」を読んで

半田 正雄

(一中二十三回卒)

視なのでガンメ、アゲ名はこれくらいしか思い出せない。富田弥作先生(修身)上山小三郎先生(算術)の二人は勤続二十五年で表彰されました。剣術では都賀田先生、先生のお子さんは勇馬といって陶芸家になられています。

会誌「一泉」を毎号読ませて頂いております。私共の時代の方の消息がないので淋しく思いました。私など持病がある者は余生幾何と思っておりますので感慨も一入深いものがあります。校歌の替歌を読んで懐かしい先生がまだ御健在のような気がしますがアゲ名も姓名も知らない先生が多いことも自分の老を思わせませす。

(3)
ブラマは教頭先生、次席にヤシヤマ(恐ろしい先生)センマとチョイトコ(宮本)は博物の先生、イボニ(藤井)は漢文の先生かと思っております。トリヤ(安田)は徒手体操の先生、ガニ(川崎)教練の先生、ガシメは歴史の先生、英語の岩崎先生はハイチン(ハイカラで背が低い)東京高師を出て着任した化学の高橋先生は就任の挨拶に桜章校の健児諸君と叫んだのでオーショーコー、幾何の先生は新任の挨拶に壇上に立たれた時鼻筋が少し曲っていると見られインカーブ、歴史の先生は少し斜

人員一五〇名と発表されましたが新入学生は一二九名でしたから二一名の落第生があったのです。三組に配分されて各組に七名宛いました。師田先生(体操)が体操の時間に「落第生は集まれ」と中央に集めその周りを新入生が円陣を作って廻わり、落第生の音頭で校歌を習いました。八年、十年在学した生徒もいました

国本(アンチ)は浅の川大橋を渡って観音町へ入る角の傘屋の長男、登校姿はゲートルを足に着けず手に持っていて、当時の小松校長(髭をはやしていたのでナマズ)は服装がやかましくなり生徒の反対にあっていました。彼は完全に十年いて卒業(卒業前に毎年演説会が開かれるアンチの題は「大隈伯と我輩」大隈伯は国家の元老である然らば桜章校の元老は誰ぞ曰く我輩とやって大喝采を博しました)。

私が五年生の時隣の机に八年在学の松本(エビス)と並びました。試験の時どうせ俺は今年卒業するんだからと答案を書かず寝込まれたのに困りました。新入生の時体操の先生から個々に姓名を名乗らされた時「停車場前のエビスを知らんか」と昔のことは大分忘れてしまいました。だが悲喜交々と感慨深いものがあります。思い出すままに……。

金沢一中在校時代と戦時中の思い出

森岡 憲一

(一中三十二回卒)

八十近くの老令でもあり、六十年以上も経っているのに、殆ど忘れていながら記憶を辿って書くことにした。

私は大正十四年卒業の三十二期生である。四年迄寄宿舎で生活した。寄宿舎では同期の木崎俊雄、向井庄太郎、穴田隆英、又野政次、木戸晋二等が居り、盛り切りの御飯では夜七時過ぎると腹がすくので、木崎や穴田等と共に時々門を乗り越えて、香林坊のくらやへうどんを食いにいった。舎監のイナリシヤ先生に見つかる、大変なことになると思い乍らも、幸い一度も発見されなかった。

同期生との交遊には色々なことがあった。愛知県より来ていた杉浦重厚という男がいた。ロイド眼鏡を掛け、いつも両手をズボンの物入れに入れて歩く男だった。日曜の或る日彼に誘われ、湯涌温泉迄往復徒歩で入浴に行ったことがあった。富山県城端より来ていた野村俊太郎(後に理兵衛と改名)は財閥の息子で、市内の高女へ通っていた姉と共に、女中付の持家から通っていた。私が遊びに行く姉がいつもピアノを弾いていた。又神戸の芦屋に別荘があり、長い休暇になると必ず別荘へ休養に

行くと言っていた。昭和十七年応召中の私は、城端の立野ヶ原廠舎に六ヶ月居たことがあり、彼の自宅を訪

問したが、大きな家で百畳敷の大広間があり驚かされた。俱利伽羅から十握三郎という男が来ていた。寄宿舎の遠足に彼の自宅(神社)を訪れたことがあり、神社の宝物の大大刀を見せてくれた。それは実に長い太刀で、握る長さが十もあるところから十握という姓になったと言っていた。私は柔道をやっており、稽古相手はいつも林屋伸太郎に決めていた。稀に武佐専雄や永島嘉一とも取り組んだが仲々勝てなかった。武佐のこ

と誘われたが私は固く断った。大沢健はその後各務ヶ原飛行第一連隊に入隊したが既に他界している。

卒業式当日の夜、五年四組お別れパーティを市内尾張町裏の料亭で、ガンマ先生を迎えて開催した。飲物はラムネ、サイダーの外に勿論酒も出たので、可なり酔った者もいた。そして私の発案で会を作ることになり、五四会と名付け会長に竹田喜久三を推戴した。然しその後一回も開いたことがなかった。竹田の家へも遊びに行っている。家は十間町にある旅館業を営んでいた。石浦潤午は金沢金沢高工応用化学科を卒業後、一家を揚げて尼ヶ崎市に移ったが、年令二十四歳未婚のまま成仏している。石川県で初めて女性代議士になった米山久子氏は彼の姉である。

北の端迄駆け廻ったことがあった。その時北満の広野を疾走する列車の中で、図らずも同期の本屋司郎軍医と出会い、異境での奇遇に双方驚き握手して別れたことがある。元氣だった彼も今は亡き人となっている。

私の大抵の腕力が可なり強く、腕相撲は大抵の者には負けなかった。四年生で厚歯の高下駄を履いて四斗俵を担ぎ、五年生で五斗俵を担いだ。力を試すために十月十六日の運動会の忍耐競争に出場し、見事一等に入賞、二等は大沢健だった。クラブの猛者共が認めたのか、鎧袖クラブに入れ

外に俳句も若干作っているが割愛する。

昭和二十年終戦時の私の年令は三十八歳、以後今日迄軍事より解放された私はいろんな事を体験している。これを書き出したら原稿用紙何百枚になるか計り知れない。同期生に係る思い出を一つだけ書き添えて擲筆する。

昭和三十四年と思うが私の町を流れている動橋川が氾濫し、県道に架っていた木橋の冠橋が流失し、これが復旧陳情のため、当時商工会長だった私は町長と共に県庁を訪ずれ、時の土木部長吉田直茂と卒業後初めて会い架橋を懇請した。彼は快く納得し木橋でなく流失しないコンクリートの橋を架けると約束してくれた。彼の尽力で翌三十五年十一月当時としては何処にもない立派な橋が架かり、その後の洪水にも耐え多くの住民より喜ばれている。又隣村の庄地区の幹線道路の舗装も吉田部長に頼み立派に完成した。吉田直茂は土木にかけては大人物である。

江沼郡から来ていた同期生は日下可、伊豆藏信一、木崎俊雄、私の四人だった。日下も伊豆藏も既に死亡し、木崎は八十近くにもなり乍ら今春東京に転居している。残った者は私一人淋しい限りである。

昭和六十一年九月敬老の日記之

当時作った漢詩二首

砲声殷々武漢戰 攀山渡河幾躍進
 忽遮斷奧漢鐵路 追敵入岳州秋深
 大東亞戰四星霜 忽降下終戰大詔
 雖和平來反我志 解武裝慟哭婦鄉

(6)

何も尋ねることをしなかったが、或は想う人がいたのかも知れない。彼も戦後遂に帰ってこなかったのである。

任地が決まるまでの間、我々は毎日二キロ程離れたマリアア工作隊に出掛け、マリアア原虫検査の仕事をすることが日課となった。小高い丘の中腹にあるその洋館の建物へ行く途中にてっぺんに十字架をつけたキリスト教の会堂が建っていた。もとより今は使われてはいなかったがこんな地の果とも思えるところにとその時は奇異な感じさえうけたものである。そこからは太平洋が一望のもとに眺められた。

そんなある日私は飛行戦隊の衛生状況視察にゆく木村軍医大尉の供をすることに、他の連中は乗機を我軍の高射砲によって撃墜された米軍捕虜の収容所に出掛けていった。

戦隊の宿舎に着いてみると、中はがらんとしていて隅の方で数人の操縦者がかたまつて遅い朝食をとっている様子。卓上に並べられたかん詰類は我々地上勤務者がお目にかかったこともないような豪華なものであったが（操縦者は航空食という特別給与である。）どことなく元気がない。

然しそれも無理からぬことであったろう。増援のため新しく一個戦隊が（五六機編成）内地を発つても、ニ

ユーギニアへ着くまでの途中、故障などで三〇数機に減り、着いて一週間後には二、三機になってしまうのだから、圧倒的に優勢な敵との連日の空戦で次々と戦友を失い、今は敵の空襲があつても僅かに残つた数機を退避させるために乗るだけの日々、補充がつかず戦えないのである。補給戦における格段の違いを痛感させられた。

一月中旬頃誰かの呼ぶ声にでてみると、珍らしく沖に一隻の日本の輸送船が姿を見せているのだ。「皆んな手を合わせて拝まにやいかんぞ」と後ろのほうで山口軍医少佐の声がした。

軍需物資、食糧等補給のため内地を数隻の船団を組んで出帆するのでが途中で次々と敵潜水艦に撃沈され、やっと一隻だけが雷撃をまぬがれこのウエワクまで一ヶ月以上かけてやってきたのである。恐らくこれがニューギニアへの最後の輸送船であろう。そしてこの船にしても再び日本まで無事にたどりつけるかどうか、十に一つもむずかしいことなのであった。

我々の仲間は一人また一人と任地に散っていった。十一名の中病気のため早く後送された一名を含め、戦後復員できたのは僅か三名である。

二月四日突然高級軍医（中佐）に

呼ばれ、パラオ島第四航空軍出張所への勤務を命ぜられる。主たる任務はマリアアによる戦力低下防止のため、パラオを経てニューギニアへ補充されてくる軍の兵員に対し、パラオ出港の時から予防のアテプリンを服用させ、その教育をすることであった。

五日未明出発に際して軍司令官のところへ申告にゆく。副官に取り次ぐと寺本中将はすぐ起きてきて私の申告を受けられた。

ラバウルからウエワクへと苦闘をつづけてきた最高指揮官の胸の内は一介の見習士官には到底推し量ることなどできないものだらうけれども、ねぎらいの言葉の中に温いものが流れていた。

飛行場まで副官の乗用車で送ってもらう。途中運転手の軍属は盛んにパラオはいいところですよと云って羨ましがっていたが南洋委任統治の南洋庁のあるところだし、何よりもマリアア蚊がいないのである。然しパラオも何時まで安穩としておられようか。

飛行場へ着くと第七輸送飛行隊の輸送機（呑龍）がエンジンをかけて待機していた。機長は約一ヶ月前ラバウルからウエワクまで我々を運んでくれたあの丹保准尉である。東の方がすこし明るくなりかけていた。

機はウエワクを飛びたち西方ホーランダの飛行場に一旦着陸（第七輸送飛行隊はここに展開している。四月二日、米軍上陸し所在の我が陸海軍奮闘するも玉砕）。一泊して翌六日午後太平洋の海原を横断すること約三時間、夕方にパラオ諸島、ペリリウ島の海軍飛行基地に着く。（九月五日、米軍上陸激戦が展開され、敵に約一万の損害を与えたが遂に玉砕する。）

丹保准尉と二人の操縦者は彼等の定められた宿舎へ行き、私は海軍の寄留者用の宿舎に案内された。その夜は五十畳もあろうかと思われる広々とした部屋で蚊帳もつらず一人やすむ。誰もいないのかわ音一つしな

い。開け放たれた窓からは澄みきつた青い月の光が差し込んで枕元を明るくしていた。明日は四航空出張所のあるコロル島（パラオ諸島は大小数百の島々から成り、コロル島が一番繁華な島で南洋庁の所在地）へ発動機船で行くことになっている。ニューギニアからパラオへ、狭い蚊帳の中に何人も入って縮こまって寝ていたウエワクのことを思うとマリアア蚊のいないここは別天地の感がした。

金沢の水

永井正三

(一中三十八回卒)

四〇年余の関西での暮らしを切上げて、金沢に住むことになった私に友は「山中や和倉、近くに温泉があるっていいなア」と羨ましがる。その上最近、家から歩いて三、四分の所にある銭湯二軒が、二軒とも試掘のボーリングが当って、「みるく温泉」「兼六温泉」と新装開店、紅茶色のお湯がこんこん湧き出て、以前より身体も温ったまるような気分である。温泉もよいが、金沢は水がうまいのが何より有難い。時々出かける大阪の水、東京の水は、一口飲んでオヤ?と思う。殊に夏はカルキの臭いが嫌でもプンと来る。落語の春風亭柳枝(八代目・故人)という人は、楽屋のお茶を一口啜って「この水は金町(かなまち)浄水だね。——こりや本物だ、玉川上水」といった利き水?の特技があったそうだが、東京都の金町浄水場は日本のワースト・テンの一つに挙げられる評判の悪い水道である。

(7) 昭和十四年夏、中国大陸で戦っていた金沢の第九師団が二年振りに帰還した。ドス黒く野戦灼けた兵隊たちが、犀川や浅野川の清流を見て「ああ、こんな水で一度でも飯盒炊

サンできたらなあ」とため息をついていたが、私も中国(旧満州)でうっかり生水をのんで、半年も下痢が癒らなかつた苦い経験がある。抑留三年のシベリヤでも水と、一枚もくれぬチリ紙には散々苦労した。帰りのシベリヤ鉄道三十日の旅の途中、いま金沢と姉妹都市のイルクーツクに入浴のため立寄ったが、駅の引込線の脇にあつた水道の柱に、日本語で「生水ヲノムナ」と書いてあつたのを憶えている。

いつの世にも抜け目のない奴がいゝるので、小松の二口丰首という人が書残した「寐覚の螢」という随筆の中に、こんな話が載っている。

天明三年(一七八三年)白山の麓で手を叩くと清水が湧き出るといふ泉が発見された。これが万病に特效がある霊泉だと、噂が噂を呼んで、金沢はもとより松任、小松、大聖寺から貴賤男女が雲集。辻々には茶店ができ、酒・餅を売る屋台も並んで「ばばさどこ行きやる三升樽提げて婆は手叩き水汲みに」という小唄が三年も流行したほどのブームになつた。後日聞いたところでは、実は山師らが打つた大芝居で、この泉の前に小さな鳥居を建てたらべ、「何の何某、病氣全快により奇進奉納」などと書き立てたのを、通行人が次々と見ては口から口、止め度もなく拡が

つて大繁昌したという次第。日本はいまや、水の汚染に対応して、厚生省に「おいしい水研究会」ができ、環境庁では「名水百選」を發表する世になつた。ミネラル・ウォーターの会社が三〇以上もでき、年間一〇万トンを超える生産、一〇二〇〇円もするのがどんどん売れている。世界一美しいと評価されてきた日本の水が、だんだん「まづくなつた」と水をさされるのは残念至極だが、金沢の水ばかりは今しばらくおいしくあつてほしいというのが、余生長からぬ私の願ひである。

癌への恐怖

牧沢善二

(二中四十一回卒)

昨年末で一〇〇名に減つた同期生が、今年になって既に三名幽明境を異にし、残り渺い人生を大切にしなければとの思いがしきりである。

同期生のK君は立派な体格の持主で、不治の病を持つている私の先に亡くなるとは思いもよらなかつた。

入院して四ヶ月程経つた二月六日に、奥様から肺癌で亡くなつたとの知らせを受けた。四日程前に彼を見舞つた時には、彼が奥様を叱りつけていた程の氣力があつたのだから、彼の

死が余りにも早いのに驚くと共に癌の恐ろしさをひしひしと感じた。そして癌の恐怖におののいた十三年前の自分のことを思い浮べた。

それは校下の癌検診で胃潰瘍の疑があるから、早急に精密検査を受けるようにと、名刺大のレントゲンフィルムを封入した通知が送られて来た時のことである。

私は胃に対して以前から不安を持つておりながら、煙草は日に五十本、コーヒーは三、四杯、お茶にいたつては渋いというより寧ろ苦いほどのものを好み、又味噌汁等はやけどしそうな熱いものを飲む。このほかわさび、唐辛子もよく喰べる。胃にあるだけの悪いことをしていたのだから、胃潰瘍の疑があり早急に精密検査の必要があるといわれると、年令からみても、初期の癌は自覚症状が無いということからしても、到々く無るのがきた、てつきり癌だと自己判断をしてしまった。癌ならば人生一巻の終りである。諦めと自棄との中にもはつきり癌と言われるのが恐くて、一ヶ月余り病院へ行かずに放置していた。この間うつうつとして何をしても一向に面白くないし、仕事にも身がはいらない。遂に意を決して病院の門をくぐつた。診察の結果は胃潰瘍だが、悪性のか否かについては、更に詳しく調べる必要

はないと、更に詳しく調べる必要

があると云われ、悪い方悪い方に解釈し癌に違いないと思つた。精密検査の結果を待つ前夜は、癌そしてやがてやってくる死を想い不安に戦いた。仕事のこと、家族のこと、友人のこと、そして幼い日々のこと等が次ぎ次ぎと、走馬燈のように脳裡を駆けめぐつた。大東亜戦争に軍人として従軍していた時は、死は当たり前であり、そんなに恐怖感が無かつたのに。

翌日病院の門をくぐる足どりは重かつた。だが結果は単なる胃潰瘍で内科的治療で癒ると言われ、一ヶ月余り悶々として過ごしたのが、嘘であつたかのようにスツと楽になつた。こんなことなら精密検査が必要と言われた時に、すぐ受けておけばよかつた、つくづく思つたことである。あの時癌の宣告が恐ろしく検査を受けなかつたら、私の胃潰瘍はどんな悪化し、最早や手遅れになつていたかもしれない。まことに恐ろしいことである。

性を痛感している。K君も自分の体を過信せず、早めに検診を受けていたならと悔まれてならない。(二月二十日記)

かえりみれば

藤木 弥三郎

(一中四十四回卒)

かえりみれば五十年、私達四四期生が、手を振りながら、厳霜碑の前でそれぞれの道を求めて、東に西に別れてから半世紀がすぎました。母校金沢一中は、金沢一高更に泉丘高校となり、従来にも増して有為な若人を送り出して行く事を期待してやみません。

私達が学窓にあつた五年間をふりかえり、思い出すままに書いてみました。同窓の諸兄をはじめ、一時期をともしにすごした諸君にも、ありし昔を偲ぶますがともなれば幸いと思ひます。

私達が入学したのが昭和七年四月、前年の九月に満洲事変、年変つて一月に上海事変、七年に入つて五・一五事件、八年に国際連盟脱退、十一年に二・二六事件、十二年の日華事変と、少年期の私達の思の外で世情は大きく激しく動いている時でした。入学試験(三月中旬)の口答試問(今では面接)の時、伊藤校長がジ

ツと顔を見て「お父さんがなくなつて気の毒だ、落胆せずにカンバリーなさい」と言われた。この年一月に父がなくなり、同郷の先輩である先生が葬儀に参列され、靈柩車の扉をしばし開かせて切々と語りかけるように訣別された事、今も時折思い出されます。ギョロ目坊主頭の先生が左側にいたが、この先生が組担任の角脇先生でした。当時の入学試験に親達がついて行くのはホンの僅かで、行きは一人で、帰りはガヤガヤと帰つた様です。入学式の後、担任の先生から、桜章の焼印の下に氏名を書いた木札をもらい、家の表札に並べて掲げ、改めて入学の実感を味わつたものです。

泉ヶ丘の校庭も桜がたくさんありますが、当時本多町の校庭でも、落花の雪に踏みまどうばかりでした。公園の花にうかれた。よつぱらいが校庭に入り込み、校舎の屋根にのぼり、大騒ぎになつた事がありました。冬の屋根雪おろしに備えてか、丈夫な梯子が常時使用状態になつているのを昇つたのです。上海に派遣されていた九師団の帰還を全校そろつて出迎えたり、満洲で戦死した不破大尉を厳霜碑に合祀する神事があつたり、尾山神社か石浦神社かどちらかの祭礼に参拝したりして、うちに、応援歌の練習が一週間ほどつ

づいて放課後に行われ、リーダーの「かけ声」が勇ましかつた。金石の角力大会の当日には、早朝に金石の本竜寺に集合して、選手を先頭に応援歌を唱いつつ浜の土俵にくり込んだものです。御承知の様に本竜寺には銭屋五兵衛の墓がありますが、当時私はその事を全く知りませんでした。一中、泉丘高校を通じて、この角力大会に六十八回連続出場を果し、今年特別表彰された事は同慶に思ひます。今後も頑張つて下さい。中間試験も終り、一中生活にも漸くなじみ、町で会う先生や上級生に、スムーズに拳手の札が出来る頃になると、学期末試験の予定が発表され、ヤルゾーと言う様な気になり、一週間程で終つたところでホツとすると、一年生は金石の浜で一週間の遊泳訓練に全員参加しました。当時浜の広さは今の二倍近くあつた様に思われます。大部分の生徒は、早朝に家を出て涼しいうちに金石まで歩いたようです。中橋のクロスから本竜寺まで、殆んど直線の街道には数ヶ所の泉があり、冷たい水が湧き出していたが、今は全く見られぬとの事です。七月二十日頃から四十日間の夏休みには、それぞれ思い思いに過ごしたのですが、運動部はじめ各部とも毎日午前の練習をつづけていました。九月に入り始業式の後、運動場や校庭の

除草をするのが恒例の様でした。始業式の時、伊藤校長が「ソノナングー、プールを造って」といった事が実際に軌道にのり、生徒も参加して掘り始め、七年十二月に完工したが、プール開きは翌八年に行われた様に思います。

昭和七年の水泳大会は、プールが未完成のため松任のプールで挙行されています。当日は雨模様だったと記憶しています。同級の林繁夫君のダイビングが見事でした。翌八年からは校内で挙行されました。当時県内でプールのある学校は本校のみで、他校の水泳部が練習に来たものです。大野川でボート大会が挙行されたのは春秋がよく記憶していませんが、サヨリを釣ったのを覚えていますが、艇庫が四高のものと隣接していて、四高ボート部も参加して先生方のクルーや各組代表クルーと競いました。

石浦神社の祭礼もすぎ、本多の森が少しづつ秋の気配を深める十月十五日が創立記念日で、厳霜碑前で慰霊祭が挙行されました。翌十六日が運動会、野試合、上級生の指導する合同体操、密集教練、各部対抗の競走はデモンストレーションの色彩が濃かった。はじめて参加する一年生は、漸く声変りしたノド一パイに声援したものです。

春秋一回の野外教練、四、五年生

の県下中等学校連合演習参加など、泉丘高校のあたりを走りまわったものです。四年生の持つ村田銃（日清戦役当時の別式銃）の空砲の音がとても大きくて、演習に参加した現役の兵士が驚いたものです。これも秋、五年生は上野の射撃場で実弾射撃演習があり、実弾の管理はとても厳重でした。右目が近眼で標的が見にくく、右目について左手で引き金を引き高ポイントにした人もいました。

一年生の時、ロスアンゼルスでオリンピック大会があり、水泳陣、三段跳、棒高跳、馬術の大障害などに好成績でしたが、テレビもなく、ラジオの普及も未してニュースは一日遅れでした。八年の一月末か二月は

じめ、今なれば冬季国体の予選の様が、コースで倒れている金商の選手をかついでゴールに入った事は、今もよく覚えています。数日後、金商の校長とその選手が来校し、全校生徒に感謝の挨拶がありました。二年生の時五月頃でしょうかストライキがあり、この事件は金沢一中泉丘高校七十年史に詳述されています。この事件の後、伊藤校長は一中を去り、七尾から青地校長が着任されました。この年九月私は腸チフスに罹り、約一ヶ月欠席しました。数学などは特にわからなくなり、以後卒業まで、

成績は低空飛行をつづけました。

本多の森には野犬がかなりいた様で、ベルが鳴って生徒が教室に入るのと二匹三匹と出て来て日溜りで寝そべり、終了のベルが鳴ると森へ帰って行きました。私達が三年生の時としますが、ボート大会の帰途一級下の赤座君が電車事故で亡くなった事は校長先生はじめ諸先生全校生徒に大きなショックであり悲しい出来事でした。私達が一年生に入った時、購買部が開設され、オバサンがずっと後まで（十五、六年頃）いたようです。四十四期生の卒業を区切りとして、母校は十二年夏に現在地に移転したのです。

本多の森次第に色づき、高い梢で「モズ」が鳴き、迫り来る冬を予告し、冷たい雨が教室の窓をたたき始めるのです。十二月半ばをすぎると、学期末試験、どうにか終ると二十日頃から年末年始の休みに入ります。

元日には全職員生徒登校し、校長先生の教育勅語奉読、講話があり五日頃まで休みでした。三学期に入ると本格的な雪となり、登校時の本多町通りには黒いマンントの生徒がつづいたものです。一月も十日頃から寒稽古に入り、強立堂（剣）、養浩堂（柔）はムンムンする熱気が満ち、納会の日にはそれぞれ武道会が挙行され、練武の技をきそつたものです。この学

期は期間が短いので中間試験があったかどうか覚えていません。当時は例年二月十一日の紀元節頃に、陸海軍学校の合格者の発表があり、四高や高工の合格者より一足早く喜びにあふれる先輩を、畏敬の眼で見上げたものです。二月下旬には学年末の試験の結果が成績順に氏名をばり出されたものです。

在学当時は修身（今では道徳）という科目があり、校長先生の講話が音楽室兼用の教室で行われた。尽忠報国と一字一字畳一枚の大きさの拓本が壁にかかっていました。音楽は一年生の時だったかもしれませぬ。山本ポンプ先生が有名な外国の歌曲の邦訳を指導されたのですが、中学校に入ったら音楽なる科目はないと思っている者が殆んどで、余り面白くない様でした。然しあのプリントを残して置けばよかつたと悔まれます。

鑄木先生が、神皇正統記や太平記を朗々と流れる様に読まれた事など昨日の様に思い出されます。諸先生かずかずの名講義を今あらためて思い出しています。泉丘高校となつてからも、良い先生の立派な講義を聴き有為な卒業生が来る年も来る年も世に出て行く事をほんとうにうれしく思っています。同窓会と泉丘高校の発展と繁栄を祈っています。

猫

中谷道子

(泉六回卒)

毎朝天候の状況をいち早く知るの
は猫のマコトである。

障子を薄く染めてくる太陽の光で
今日は一日晴れるぞ、という時は背
伸びを繰り返しながら出て行く。そ
んな日は洗濯物を外に出しても大概
夜まで晴れている。

マコトを中心にうちは七匹の猫が
同居している。春の陽の当る場所で
一斉に毛づくろいをするさまや、一
日一度のランチタイムなどは壮観で
ある。この一群が茶の間にくつろい
でいる時、酔った勢いで人間、つま
り私がバカ踊りをやると一斉に猫の
かおが此方を見る。勿論人間を批判
している眼である。その時の眼は女
房に呆れ果てた、という主人の眼と
大変よく似ていて面白い。

七匹にはそれぞれ名前が付いてい
てタロウとかアヤとか呼ぶと不思議
なもので尻尾をトントンと叩く。
ある時そのハンサムのタロウが恋
をした。相手は野良猫だがまっ白で
眼は金色の美人であった。タロウは
茶虎で昨年上映の「仔猫物語」と全
く偶然の同一コンビになった。

日夜お互いに恋の唄を吠えつづけ
成就したかのように見えたが、恋仇

があらわれたのである。黒白の精か
んなオス猫である。茲に猫の強さを
示す色合いがあつて強度No.1は黒、
次に黒白と来る。うちで生れてうち
で育つた温室育ちのタロウはそのNo.
1に叶う筈もなく退散、又他の猫た
ちとのんびり日向ぼつこの毎日だった。

然し外の二匹の恋唄がうるさすぎ
て私は意を決してその白猫を掴める
ことにした。うちの車庫辺りで出産
という事になるとそれは大変なこと
である。これ以上猫にはかわりた
くないのは主人も私も同感であり、
遂に白猫の不妊手術を思い立ったの
である。

二、三日後に入浴をさせ、獣医さ
んへ連れて行き施術した。大変利き
分けがよく獣医さんでもほめられた
が、お腹に宿っていた仔猫は黒白で
はなくて茶虎と茶白であった。

タロウは手の早いドンだった訳で
ある。残念だがもう致し方がない。
それ以来主人は風邪を引いて鼻があ
かくなるまでチリ紙を使っている。

「今年の風邪はしつこい」
と言っているが、私は猫のたたり
だと信じている。そして私の風邪は
主人からうつされたものだと思っ
ている。

そこで外の温室をその白ちゃんの
為に開放、彼女は毎日優雅に私の朝
晩入れてやる湯タンポを抱えて寝て

いる。勿論食事付きである。
今年も又猫の春が訪れて来たよう
である。

青春を人生の終りに!!

千代信子

(泉八回卒)

乙女心のノスタルジアと笑われる
かもしれないが、毎年度の季節に
なると、母校泉ヶ丘高校の校庭の横
に車を止めて、ふと昔を偲ぶことが
あります。

早めし、ダイヘン、授業のエスケ
ープなどいわる当時の高校生のち
よつとした「ワルのワンセット」を
無事突破?してきた私だけに高校生
活の思い出は非常に印象深いものが
あります。

その高校時代に得た友だちとのつ
き合いを今も大切に、近頃では「リ
ッチの会」とよび名をつけて、事あ
るごとに集つてうまいものを食べ歩
いたり、旅行をして楽しんでいます。
思いっきりかしましく好き勝手を云
い合い、何年経つても当時と変らぬ
自分達に思わず苦笑することもあり
ます。

又エッチな会話も平気で出るよう
になったのはやはり年のせいではし
うか。

今、私達の何かと気苦労の多い世

代に心の通じ合ったすばらしき仲間
達との語らいは、時にはうき晴らし
にもなり、時には今後の大きな励み
ともなっています。

ただ、これだけステキな美人ぞろ
いの「リッチの会」に不思議と男性
が一人もいないのです。……やはり
怖いのでしょうか……。

さて、私の生きがいとしている仕
事ですが全日本家庭教育研究会きた
ぐに支部の経営で、これは幼児、小
学生を持った若いお母さん達に子供
の家庭でのしつけ(習慣づけ)がい
かに大切かを話し合つて、勉強をし
てゆくものです。人づくりの根本は、
家庭教育にあり、特に母親がしっか
りとした考えで子育てをしてほしい
のです。

今年から、倅も一緒に取組んでお
り、私はこの仕事に情熱をそそぎ、
神様が私に与えて下さった最大の仕
事と感謝して頑張っている毎日です。
ところで、今年は五十の大台です。
いやですな。……としては自分の心で
とるものと信じ抵抗しています。自
分だけは二年に一つしかとしをとら
ないぞーと足をふんばっているのだ
ですが、そうはいきませんね。

子育ては母親の本能とはいえ、あ
らゆる苦しみをのり越えて子供達を
育くみ、やがて子供は結婚、そして
そこから訪れる自分だけの人生。こ

の生涯、最も大切な時期が多くの人々の場合、あまりにも淋しく味気ないものと思えます。

誰れかが云います「青春を人生の終りに持って行きたい!!」と……。

やがて来る自分自身の人生。その時期を楽しく過せるならばどんなに素晴らしいことでしょう。心に太陽が持てるように、健康で若々しい心をその日のために持ち続けなければなりません。

八月の誕生日に、毎年子供達が花束を贈ってくれます。「又一つ若くなって、おめでとう!!」と云ってられることでしょう。その時私は明るく元気に「ありがとう、これからよ!!」と云おうと思っています。

「健康ア・ラ・カルト」を出版して

林 茂

(泉十回卒)

私は昨年「健康ア・ラ・カルト」という西洋医学と東洋医学を合わせた健康アドバイザーの本を出版しました。

本など偉い先生方でないと書けないものだと思っていた私は、出版当初おこがましくて、気恥かしい思いがしばらくは抜け切れませんでした。実は、その三年前からあるシヨツ

ピングセンターの広告紙に書いていた健康一口メモが百話を超えたので本にまとめたらという話が出たのがそもそもの始まりでした。

これまでまったく経験したことのない著作という仕事は大変骨の折れる作業でした。夜診療を終えて深夜まで、休日を返上して、内容の加筆訂正から総論の部分の書き足しといった仕事に取り組みました。何度も途中でやめようと思いましたが、出版社をはじめ他の人々に本を出すと言った手前、そうもいきま、せんでした。背水の陣でなかったら、今頃この本は出来上っていなかっただろうと思います。出版社の方でも本の内容がプームの健康についてということもあり、熱の入った協力をいただきました。手間どる私を時にはおだて、時には叱咤激励してくれました。

私は誤植のある本を随分見てきましたから、自分はぜったい誤植のないものを出したいと思い、何回も校正した筈だったのに、できてみると三ヶ所も誤植が見つかりガツカリいたしました。

出版した後、幸運にもマスコミに取り上げられ、書店にも置いて貰えたのは有難い事でした。

昨年泉丘高校の記念祭の折に母校を訪れ、棒田校長先生はじめ日頃お

世話になってる先生方にこの本をプレゼントしました。同窓会(泉寿会)の会長をしている小泉君から、会員が持っている役立立つからと全泉寿会会員の方々に配布していただいたのは身にあまる光栄でした。

本を書くずっと以前から、自分が生きた証しとして何か後に残したいと思っていたのですが、はからずもこうして自分の著書を世に出すことができ、大変嬉しく思っています。

読者の方々からの反響もいろいろありました。中には私の本を数十冊まとめて買って知人にさし上げるのだという人もいました。また本に書いてある通りにしたら、今まで悩んでいた魚の目がとれたという人もありました。この本を何回も繰返し読んで、自分達の健康の指針にしますといってくれる人もいました。このような声を耳にして、本を出して良かったとしみじみ思っている今日この頃です。

一泉短歌 クラス会

四ヶ浦 他美子
(通信二十八回卒)

夕立の晴れ間急ぎて友の待つ
赤穂の谷の湯の宿目指す
鯉の里赤穂の谷と名に恋えば
吾が里近き山村の宿

村出でて山の端に建つ一つ宿
門川の流れ水走りつつ
四十年の歲月経るぬ友垣と
今宵迎えん師のふた方を

幼日の記憶に若き師の君の
今は六十歳越えまししと
折々は便り耳にし過ぎし友
幼き面影今に残るを

継走の予選に負けしやくしかる
昔を語る友の一人は

此の谷の清瀬に釣りし岩魚とぞ
友がもてなす大盃の酒
幸あれよ昭和の御代を生きゆかん
吾ら十七年度卒業生

幾星霜窓過ぎゆけるせせらぎに
眠り覚め居り山の湯の宿

一泉絵画



昭和23年卒
中村秀雄氏の作品

お便りします

米山孝二
(通信制七回卒)

卒業生の皆様、お元気ですか。

二十三年程前、本校を卒業させていただいた者です。同じ通信制の卒業生のすずめでこの便りを送ります。皆様は旅がお好きですか。私も大好きです。卒業以来、旅ばかりしています。

卒業後は、働いてお金が貯ると旅に出るとい生活でしたが、外国を旅するようになってからはお金が不

足するし、思うように広範囲に動けないので、今は航空機のチーフ・パーサーという変わった仕事をしていま

す。この仕事は文字通り、世界中を旅することができず。行けない場所には休暇の時、他社機で行けます。

飛行機の中での出来事や、外地での面白い話など、お話ししたい事はたくさんありますが、それはお会いした時の楽しみにして、今日はちよつと真面目に、日本人と外国人の「学

ぶ」姿勢について私の目に映ったことを述べてみます。

違いと言っても、各国、千差万別でしょうから断言するものではありませんが、傾向という程度に聞いて下さい。

「日本の学生はよく学び、学力も高い」と言われますが、私の見た限りでは、それは高校卒業までで、大部分の外国の大学生の方が一生懸命に勉強しています。

日本では、社会に出れば猛烈に働き、決められた目的の為に学ばなければならぬので、大学は息抜き期間なのではないでしょうか。

だから、「期限と目的の為にしか学ばない」習慣が身についてしまうのではないのでしょうか。

日本では大学に入学してしまえば大概卒業できますから、それは仕方

のない事かもしれませんね。

その意味で外国では、入学よりも卒業が難しい通信制に似ています。必死で自分自身で学ばない限り、絶対卒業できません。だから一刻を惜

んで学ぶ習慣がいつたまま社会に出て行くので、卒業後も更にあらゆる事に興味を示し、学ぶ姿勢は崩れません。

大学期間中に、生涯学習の躰ができてしまうのです。

日本人も会社ではよく学びますが、それは経済的、工業的な「目的」の為に学ぶので、「教養」や「楽しいから学ぶ」という比重は少ないのではないのでしょうか。

外国人と話していて、その話の内容の中広さ、豊かさに驚ろかされま

す。興味の対象が実に広いのです。目下のところ、外国人は精神的な生活を豊かにする為に学び、日本人は経済的な生活を豊かにする為に学ぶ、と言ったら言い過ぎでしょうか。

日本は開国以来、西欧合理主義を追い続け経済的に追いつけた今、教養文化面でも、本当に対等にお付合

いできるのでしようか。日本人の私は、つい自分の主張と違う人を避けたり、自分の利益だけを追っていたり、エチケットに反する行動をとって、ハツとする事

があります。

外国で経験する実にうれしい事は、自分と違う意見の人に、恐る恐る自分の意見を言ってみると、実にあっさり認めてくれ、その意見を大切にしてくれる事です。

判断する場合、それは片寄らないバランス感覚の良い教養知識に裏付けされており、相手の立場を認めるという姿勢に貫かれている事がはっきり解ります。

それは日頃学ぶ事により、自分というものがすっかりできていくのだと思われました。

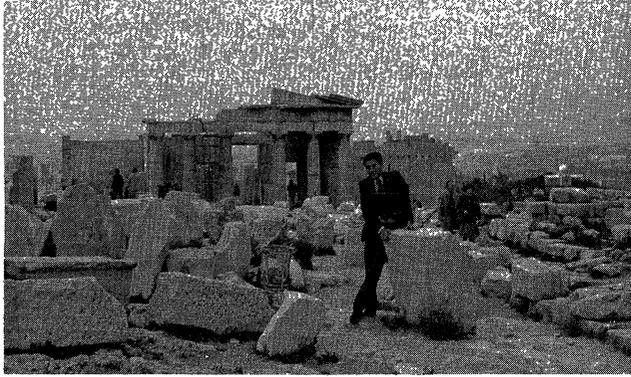
最近外国で日本の方を見かける事が多くなりましたが、皆様方大変なスケジュールの中で一心不乱に先を急いでおられるようです。ちよつと立止まって友人を作って欲しいなと思ひます。

私自身も米国人に誘われてテニスを始めたら面白くて、ついある団体のコーチの資格をとってしまったり、イギリスでのダンス・パーティーの楽

しさが忘れられずダンスの教師資格をいただいたり、中国美人の話す中国語の美しさに魅せられて、「ニイハオ、ニイハオ」をやったり、タイの

キックボクシングに感化されてジムへ入りびたったりしています。

学校は人生で学ぶ為の基礎を作る



近づくぐく思います。

日本は安全で豊かな国なので、それから、その国に住んでいる我々は、もつともつと、外国から楽しく心豊かに生活する方法を学んで生活をエンジョイしたらどうでしょうか。

私の二十年の外国とのお付き合いで得たものは

「走つたら休むこと」

「相手を認めること、一方的にならないこと」

「相手が不愉快にならないよう心を配ること」

「人生を楽しむ為に、多方面に興味を持ち積極的な姿勢で生きること」

「良いバランス感覚を持つ為には教養を身につけ、片寄らないこと」

等です。気づいてみたら、私も四十才を超してしまっていました。まだ妻もなく、旅ばかりしていて、日本にくつろげる場所を持っていません。

随分批判してしまいましたが、いつも旅が終り、日本に帰ると思うことは、私にとって日本が一番良い国です。

だから日本の良い習慣「お見合い」(最近輸出されているそうです)の厄介になってみるつもりです。

それでは皆様、どこかの国の街角でお会いしましょう。

再見(ツアイ・チェン)

能登方言と私

馬場 宏

(通信二十七回卒)



「あなたは、どうして方言調査に夢中になるのですか」とよく聞かれるが、返事は登山愛好家ではないが、

「其処にあるからです」である。

私の趣味は天文学、音楽、地質学、考古学等々と数多いが、ある程度進むと足踏してしまふ。奥能登では、

すぐれた指導者、大きな図書館が得られないからである。それに天文学をやると望遠鏡が必要となるし、音

楽をやれば高価な楽器がほしくなる。私の若い頃は、とても購入できる時代ではなかった。

これに比べると方言は身近にある。まず、自分が持っているのである。

私の方言採集は昭和二十五年にさかのぼる。動機は丁度通信制の高等国語で万葉集、枕草子などを学習し、

その時代の言葉が残存すること、又「言語の本質」(安藤正次)では方言が言語研究の貴重な資料となることを知ったからである。レポートに

方言採集の課題があった。

大伴家持が能登で詠まれた万葉歌の「かしまねの机の島のしんだみを

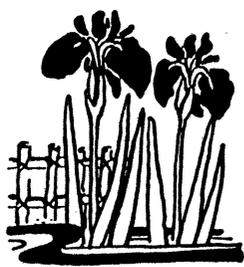
……」とある貝名は今でも中島町を中心に広く使用され、枕草子の「星はずばる……」の星名もシバリ・ヒバル等と民謡などの中に残存していることを知った。又「能登のべっ、ちや」も古語辞典で「べち、は別に同じ」とあり用例は源氏物語とあつてこれ又上代語であることを知ったのである。

能登では一つの言葉に対して一地点でいく通りもの方言用法がある。例えば「行かれる」を「行カス・行カンス・行カシンス・行カッシャル・行ッテヤ」などと用いる。言葉が堆積した結果である。半島は言語の吹きだまりとなり歴史的に縦であったものが横に並んでいる場合があり、これを比較研究すれば国語史の解明に役立つといわれる。

全国で方言量の一番多いのは魚の「目高」だといわれるが能登では子供などを肩にのせる「肩車」である。今までに「チョンノクビ・チャンカボンカ・イチヨマンチョ・カンパ」など二〇〇あまり採集したがまだまだありそうである。しかしこれらの貴重な方言も急速に消滅しつつある。今にして記録しておかねば永久に失なわれる。この思いが私を方言調査へと駆りたてたのである。

「人工衛星天翔くる科学時代になんと逆コース的な趣味」「哀れなるものよ汝の名は方言採集狂なり」、別のもう一人の私の囁きを背に聞きながら泉丘高校通信制とともに歩んだ方言調査歴は三十年を越してしまつた。どんな些細な事でも三十年継続すれば一つの形めいたものができる。先般刊行の『能登の方言』には約一八〇〇の方言を記載できたのである。又、研究発表会や講習会で使用する『能登半島方言地図』もこの成果に他ならない。更にうれしいのは学会で中央の学者、先生方と親しくお話できるようになったことである。言語地理学のグロータース神父、アクトの権威平山輝男博士、国語学者の金田一春彦先生、徳川宗賢先生等々。

能登の方言資料は無尽蔵である。さらに調査を積み重ね「能登半島の言語地理学的研究」「能登方言辞典」をぜひ完成させたいと思う。



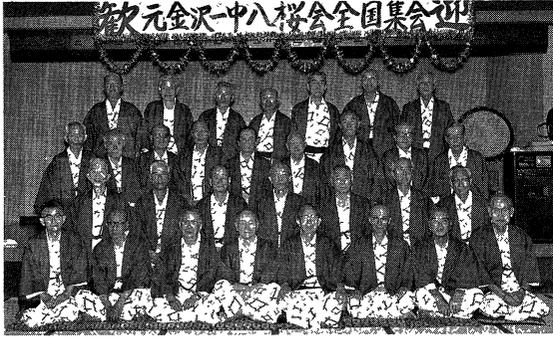
同窓の集い

記

◇金沢一中八桜会全国大会

我等金沢一中八桜会昭和六十一年度全国集会は、昨年度の京都大会の申し合わせに従い、去る十月十二、十三の両日に亘り総勢三十一名参加の下、先ず郷土金沢に集合し、新発足の香林坊界隈見て歩きの後、懇親会場を粟津温泉かみや旅館に移して

いと盛大にとり行なわれた。左にその状況の概要を記し、不参加会員への報告にも代えさせていた



先ず初日十二日(日)は朝からの雨で天候の不安が感じられたが、午後に至って雨殆んど止む。

約束の集合時刻午後三時、香林坊アトリオ地下一階英菓局前に集合完了。各自久闊を述べ合った後、関東代表谷内上君の音頭で英商会の新装開店を祝い声高らかに祝盃を乾す。

こうして本年度の大会の幕は華やかに切つて落とされたのである。自らシャンパンをぬく英勝雄君の胸中や如何に。まさに感無量というべきか。

祝盃を終えた後、日程に従い三時五十分までの小一時間を新香林坊界隈の見て歩きの時間とする。

ここではその詳述は割愛させていただくが、我等会員一同は想像も及ばなかった程の近代的で然も瀟洒な雰囲気の漂よう中心街として生れ変わった香林坊の姿を目のあたりにして深い感動を覚えると共に、その素晴らしい誕生を心から祝福し喜び合ったのである。

最後に一行は新大和デパート(地上九階、駐車場を含めて地下三階、総面積三二〇〇〇平方米、総工費二二〇億円)の屋上にのぼり、遙か医王、戸室の山々や日本海を遠望し、思い出多い金石、大野、河北潟に尽きぬ名残りを惜しみながら定刻四時

迎への旅館バスで一路粟津温泉へと向つたのである。旅館到着五時、玄関で待ちかまえてくれた先発隊諸君の笑顔に迎えられ各自の部屋で旅装を解く。暫時休憩、入浴後正六時、

はるばる岡山から馳せ参じた辻弘文君の乾盃の音頭でいよいよ開宴。互に盃を交わすことしばし、既に古稀をすぎた好々爺も忽ちにして二八の少年の昔にかえり、懐旧談に花が咲くことしきり。一同の顔もほんのりと赤らんだ頃、時やよしとばかりに本宴のメインイベント特別出演藤蔭真喜枝(野村潔君の愛妻)杜中の日本舞踊の開始となる。その余りの素晴らしい演技に一同思わず盃をすて、

我を忘れて見惚れること数十分間、野村君御夫妻の御厚意に心から讃詞と謝意を表した次第である。さて続いては会員の素人演芸のお始まり、先ずトップは大村孝一君の藤蔭流に劣るとも優らぬ我流?黒田節の踊、次いで小堀広君のカラオケ「さざんかの宿」の迷調子、川島重男君の懐しい小学校唱歌「水師營の会见」等々のとび入り演技に同時を忘れて歓を尽くすも定刻九時、関西代表能木場俊吉君の閉会宣言で会員名残りを惜しみつつ重い腰を上げる。

翌十三日(月)は絶好の行楽日和に恵まれる。午前九時マイクロバスで

旅館出発、途中小松博物館で開催中の宮本三郎画伯展をじっくりと団体鑑賞し、後は一路高速道路を通り金沢へ直行。予定どおり午前十一時きっかり香林坊到着。

最後に福田正秋君の得意の名調子による別れの挨拶と八桜会の万才三唱で目度度く大会の幕を閉じ、来年度の再会を約して解散、三々五々家路についたのである。以上

備考

一、当日の参加者(三十一名)

関東東海 福田正次郎、谷内、渡

辺、林、三上

関西山陽 水落、坂、勝木、千田、

能木場、辻

北 陸 中一、沖野、織部(富

山)高崎、箕打、宗広、

相川、大島、中島、福

田尚造、本村、小松、

川島、橋本、大村、福

田正秋、長谷川、野村、

英、小堀(石川)

二、来年度の大会は申し合わせの結

果、確定的ではないが三上修三君、

山本辰雄君等の御厚意と御尽力に

より犬山市で行なうことに内定し

ました。

三、計報 松任市田川衛君が本年一

月二十七日死去されました

のでお知らせします。合掌

(世話係記)

◇四十・四一回生本多会

久しぶりに関西在住の40・41回同期生を、三月十日の夕刻、大阪市南区笠屋町「レストラン乃呂」で開催したところ、体調が悪いなど、いろいろの事情で出席者は僅かに五人に留まりました。懇談会に先立ち、去る一月三日の夜心筋硬塞で急逝された会友(41回生)の赤崎雄七郎氏を偲び、一同冥福を祈りました。彼は生前仕事のほかに、社会福祉の面でも熱心に活躍し、大阪府知事、大



阪市長から表彰されたこともあり、同期生としては、誠に惜しい人をつくしたものだと思えます。何しろ久しぶりの会合なので、お互いの健康を喜び合うと共に、少人数ながら賑やかに談笑し次回を約し散会しました。出席者は、能木場俊吉、千田民夫、八十島健二、三浦繁雄、小泉茂吉 (小泉記)

◇第十五回一中十桜会

(四十二回卒)

期日 六十一年十一月二六・二七日
場所 栗津グランドホテル

毎年恒例の十桜会も今年で十五回目を迎えた。久方振りに藤田誠一、塚野善藏両先生の昔に変わらぬ若々しくお元気なご様子に接し、又同伴ご夫人八名もまじえて総勢四十八名の出席を得て和気あいあい旧交を温めた。

本年は吾々の大半が「古稀」に当るので、これを記念して物故組友六十八名の追悼法要を栗津の真言宗大王寺で厳修した。梶川会長の生前を憶ぶ切々とした追悼の辞に始まり、全員香をたむけ修師の法話を戴いて終了した。尚、遺族を代表して故辻永徳夫人が故人の遺影をいだいで出席され、ありし日の追憶を新たにしました。翌日散会后一同揃ってバスに便乗

し秋の那谷寺を探勝した。

恩師後藤重郎先生が動脈硬化症で去る六月十五日に他界された。一昨年の金沢総会に奥様御同伴でご出席されたお元氣な姿がしのばれ謹んでご冥福をお祈りします。

今年は秀才吉田進君や創会以来の名幹事辻永徳君をはじめ大量七名の組友を失った(萩野、服部、天野、府中、畝田)お互い積極的に健康法を講じいつ迄も元氣でいたいもの。来年の十桜会は伊豆の修善寺温泉で十一月中旬と決った。万難を排し出席されんことを願いたい。

〔出席者〕藤田先生、塚野先生、吉田正一夫妻、西村忠恭夫妻、柿木義夫夫妻、葛西満夫妻、笠間国威夫妻、坂本六郎夫妻、玉村文雄夫妻、諸江敏夫妻、故辻永徳夫人、山崎大喜男、山本欽一、中谷郁夫、久保木信夫、久保田全俊、古沢英雄、中側尚英、鴻野五八、酒井正、福塚賢二、二口一雄、浅本行雄、東勉、井口鉄男、梶川欽一郎、小林幸雄、駒居三郎、柴野勇、新保彦四郎、杉谷勇、高木弘幸、高島有幸、玉井政義、淡中孝一、中井忠則、松本芳二、宮川乙吉、室木弥太郎、細木忠清(以上)

(諸江記)

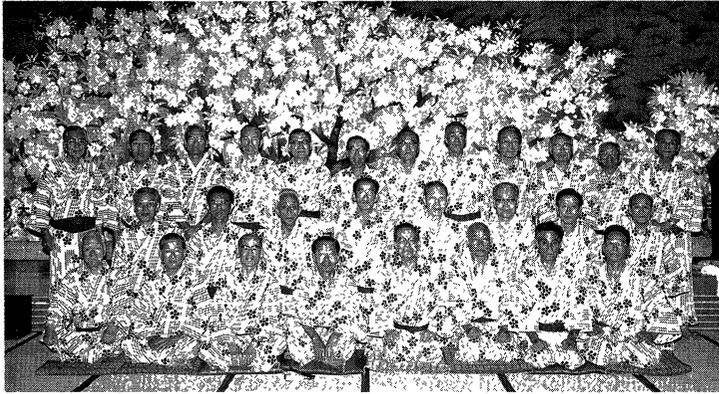


◇ハナ先生出席

四十六期(昭和14年卒)

クラス会

金沢の宮沢チャン先生、富山の上田コース先生には時々お会いする機会がある。今度は福井の塚野ハナ先生に声をかけてみようということで鯖江市にお住いの塚野善藏先生に連絡したのが一週間前。さすがにハナ



先生、すんなり遠路御出席をいただいた。

それに今年のクラス会は温泉一泊。それもやるからには超一流というところで開催場所のごとく

於 山代温泉 「ホテル百万石」

昭和六十一年八月十七日

さて、卒業後五十年近くになった白髪禿頭のオッサン連中。会場へ御案内した塚野先生を見るなり

「一体どっちが先生で生徒か判らんガイヤ」

「アア、ワシヤ負けた。先生いったいくつや」

それもその筈、本年七十八才の塚野善藏先生髪は黒々、眼鏡の下の顔色からハナの高いことまで五十年前とあまり変わらず、国立福井大学の学長代行までやられたときいているが、昭和十年代前半の一中時代もユニークな若手優秀先生の一人であったと出席クラスメート全員青春の思い出にひたつた次第。

カクレ煙草、カンニングをこれらユニークな先生達に見逃して貰い、退学を免れた豪傑も前後のクラスを含まれ何人おることか。

さてクラス会は塚野先生の御挨拶、幹事の一泉同窓会報告、乾杯の音頭は遠来の村井又兵衛君。最後の万歳三唱は石野竜山君でしめくくったが、この間交盃、歓談。校歌、応援歌連

続八題。

散会後は流れ流れてホテルの「お祭り広場」へ。

○ハワイ踊りのピチピチにうつつを抜かす者。

○カラオケの美声披露に得意満面の者。

○さては「大浴槽」でイイ湯ダナをきめこむ者。

一泊クラス会は夜の更けるのも忘れさせる効果があった。

後刻、塚野先生をはじめ級友から幹事宛へ礼状数通がとどいたが「曰く「ホテル百万石みたいところは日本国中どこにもあるまい」曰く「塚野先生の若々しきを見て大いに頑張らなきゃと思う」まことに良き一期一会であった。

〔出席者名〕
「関東」村井又兵衛、杉田賢四郎、山本周三、尾本堅太郎、村上淳男、中村敏

「北陸」石野竜山、石立実、石田勉、稲松敏夫、片岡茂太郎、加藤智可良、金谷与平、瀬川雅善、辻良徳、鍋谷太市、中村政男、浜里三郎、広岡徳、深田元夫、松本忠男、松本豊次、宮北啓、宮本敏之、宮村利雄、三崎秀夫、寺内良雄、青梅洪治、太田定夫

(太田記)

◇関西八泉会

第六回開催報告

去年(六十年度)は山代温泉にて八泉会合同の同窓会あり、関西八泉会はその会に合流、本年度は再び関西八泉会にて九月二十七、八日一泊二日の小旅行に丹後半島一周へ出かけた。

二十七日京都駅に集合、マイクロバスにて出発、天の橋立經由宮津湾大島にて一泊、関西八泉会は毎度のことながら和氣諷々、夕食後団欒夜半十一時暗闇の波打ち際に立つ、海面に夜光虫を見つけ一同波とたむれる。朝早い漁村のこと、すでに寝静まる夜道を下駄の音カラランカラン響かせながら久し振り童心にかえる。翌日(二十八日)紺碧の若狭国定公園を回遊、一同満足のもと来年の再会を期し、京都駅にて解散する。

尚◎毎年一泊旅行開催のこと

◎関西八泉会会員に限り慶弔金万単位で支出する(但し当分は弔に限る)旨決議する。

(幹事 山本他計志記)

◇市場一泉会

六十一年度の総会を兼ねて懇親会を左記のように開催し、会員二十七名の内十六名(一中40回、泉丘19回迄)出席し、母校の歌を高唱すると共に市場人の軒昂たる意気で会場がカチ壊れる様な盛大さでした。

記

一、片町二丁目 割烹「浜長」
一、十一月十八日(火)午後六時より
一、決算報告(成瀬清次)及執行部の改選

会長(新)青梅浩治(一中46回) 前副会長

副会長(新)土谷 勇(一中53回)

尚初代会長成瀬清次(一中40回) 及三代会長平石英雄(一中41回)は夫々顧問に選出された。

(平石記)

◇金沢一中第四十七期

在京同窓会開催

本年もあとわずかとなりました。十一月二十六日に早目の忘年会を兼ねて同期の会を銀座やす幸で開催しました。

坂本代議士、中島先生、安嶋東宮大夫など多士さいさい相集いにぎやかな一夕でした。



〔出席者〕池保、大橋和義、川島榮一、小鍛冶敏雄、坂本三十次、杉田賢四郎、中野喜代二、中島章、中村達、新田正之、半田博、深見信一、福岡二郎、本田尹夫、宮保彦継、諸江義厚、山口尚三、安嶋弥、清水誠三。(中野喜代二記)

◇武川君の文学賞

受賞祝賀パーティー

(一中五十五回卒)

第14回泉鏡花記念金沢市民文学賞が武川龍雄君(ペンネーム内村晋)

のノンフィクション「死よ何というつらさ」に贈られ、受賞を記念して五五会の有志15名が集まり、十一月二十五日の夜金沢市広岡のホテル六華苑で祝宴を催した。

川北君の祝辞につづき乙村君(金沢市総務部長)から権威ある同文学賞についての説明や受賞の経過報告のあと、出席者一同武川君の栄誉を心から祝い作品を中心に、またそれぞれの近況をも語り合いバックミュージックに校歌・応援歌の流れる中で夜の更けるのを忘れて盃を重ねた。

内村晋、本名は武川龍雄、二十三年金沢一中卒、金大生協専務理事。三十四年「皮はぎ」で読売短篇小説賞を受賞。著書に「母の手紙」(六十年)がある。

受賞作「死よ何というつらさ」は五十七年四月ガンのため亡くなった奥さんの二年間の告知を秘しての看病記録で、作品は悲しみをたたきつ



けるだけのひとりよがりの傾向をのがれ、完成度の高い文芸作品として評価された。

〔出席者〕武川龍雄、川北篤、乙村薫、鏑木麻岐夫、小西昭、島厚夫、竹俣郁雄、田村裕喜男、経田政人、出口善人、中橋寿雄、西川晃、西下文哲、花谷昭五郎、森晋二、山田浩

以上

一 泉川柳

北村 具 穎

(号 北村幽屋子)

泉8回卒

この犬の 眼のさみしさに 買うと決め

それぞれの 立場を神に

笑いから 戻ってみたら

ビー玉を 透かせば幼い

終電に 二人残った

税という 重荷おろして

祈ってる 手が無意識に

蠅を打つ

客帰る

目が出合い

目が出合い

客帰る

手が無意識に

蠅を打つ

◇県文化活動奨励賞に

山森専吉氏が



十一月八日昭和六十一年度県文化活動奨励賞の受賞者十五名が発表された。

この賞は長い間地道な文化活動を続け地域の文化向上に貢献した個人団体に贈られるものでその中に一中第三十三回(大正十五年)卒の山森専吉さんが選ばれた。

◇「森田柿園幻の文庫」が正式に県に寄贈される

森田柿園の嫡孫である森田良雄氏(一中19回||明治45年卒)から郷土史家森田柿園の写本典籍三〇〇点(九五〇冊)と絵地図九〇枚が石川県立図書館へ寄贈された。

森田柿園は幕末から明治にかけての加賀藩士で明治維新後は県職員となり退官後は藩史の研究に打ち込み「加賀志微」「能登志微」などのほか「金沢古蹟志」「北徴遺文」「白山神社考」など多数の著作を残し、

なお明治の初期には福井県との間で争われた白山の帰属問題で綿密な歴史考証を示し決着をつけ大きな功績を残した人物であり、これらの図書は昭和4年頃柿園の子孫から当時の郷土史家たちが預かってそのまま県立図書館に保管されてきたものでその帰属をめぐって「幻の森田文庫」といわれていた。今度その経緯が判明し森田良雄氏の好意で一括石川県に寄贈されることになった。

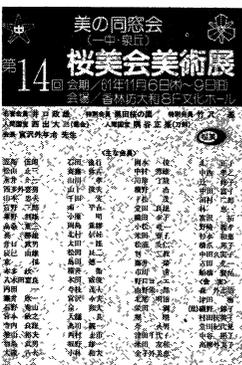
◇石川県洋画家(戦前)に注目される金沢一中出身者

石川県立美術館が昨年八月二十一日から一ヶ月間開いた「石川洋画のあけぼの——戦前までの歩み」を企画した折調査の結果、これまで初期の県内洋画家は県立工業学校出身者がほとんどと見られていたが、金沢一中卒業者がかなりいることが分った。これは明治三十年から同四十四年まで一中で教鞭をとられた佐々木三六先生(東京都出身洋画家)の影響が大きいといわれている。同展が取りあげた作家十八人、作品数五十六点の中で一中卒業者伊東哲(一中16回卒||明治42年)布目敏行(一中12回卒||明治38年)氏が含まれている。今回取りあげられなかったものの、このほか多くの作家が一中より輩出していることが分った。

◇第十四回桜美会美術展

新装なる香林坊 大和文化ホールで

一中、泉丘の美の同窓会。秋の美術展が十月装いも新しくオープンした大和8F文化ホールで六十一年十一月六日より四日間開催された。展示作品は人間国宝の西出大三(一中39回)氏の截金、隅谷正峯(一中45回)氏の刀剣らの作品をはじめ黒田桜の園外一〇三点が展示され、鑑賞に訪れる同窓生に加えて大和デパートオープンに併せての一般の人々で期間中終日賑わった。



事務局より

◎一泉同窓会委員の変更

泉四回 三野裕、宮下明、吉田正剛の三氏に変わって中川清(野々市町二日市町四九五―三 電④六七六八 寺井俊二(野々市町高橋町五―二八 電④五七九四) 塩谷伸夫(金沢市泉丘一―二―一〇 電⑦五一八〇)の三氏が就任。

◎同窓生より著書の寄贈

次の同窓の方々から著書のご寄贈をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

- ◇宮川隆泰氏(一中五十四回)
- 絆 (宮川隆英追悼集)
- ◇浦 茂氏(一中三十四回)
- 刀剣と歴史
- ◇安原一郎氏(一中三十五回)
- 足跡(北の都を離れて半世紀)

あとかぎ

「一泉」十三号を発刊いたします。多くの会員の方々からご送稿頂き有難うございました。会誌は会員の皆様によるこばれ、親しまれるものと努力しております。

会誌に対するご批評、ご要望を頂きました随筆、所感、会合報告などどしどしご送稿下され、ご支援を賜われますようお願い申し上げます。(事務局堀口)